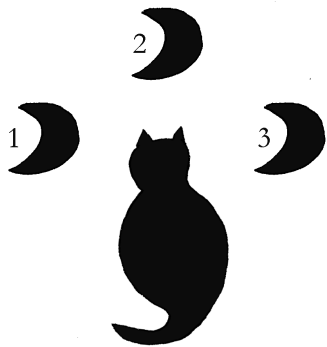


第5話 落花生とカメレオン



時計の針が一時をまわっている。

第一撮影所の〈小道具倉庫〉で、ミツキは倉庫番の前田まえださんに頭を下げ、

「すみません、終わりました」

と、かしこまった。

「いいもの——シュツ——見つかった？」

前田さんは決まって前歯の隙間すきまから空気を送り出しながら話す。

「いいえ」

「ああ、そう——シュツ——それは残念だったね」

「時間外に、いつもごめんなさい」

「いいんだよ——シュツ——いい映画ができれば
ね」

いい映画か、とミツキはつぶやいた。耳の遠い前田さんにはたぶん聞こえていない。

いい小道具が見つつかればいい映画になる？ 本

当に？

何度も繰り返してきた自問だった。

「また、来ます」

「はい、お疲れさん——シュツ——ゆっくり、おやすみ」

いやいや、とミツキは首を振った。まだ眠るわけにいかない。

倉庫を出ると、北側のスタジオDに「撮影中」の赤いランプが灯ともっているのが見え、働いているのは自分だけじゃないとよくよく自分に云いい聞かせた。

「そうだよ。俺だって、今日は徹夜なんだから」
控え室に戻ると、助監督の水島みずしまが口を歪ゆがませてぼやいた。

「で、ミツキの方はどうなの？ 例のもの、見つかった？」

「いえ、見つからないです」

「まあ、そうだよな。でも、どうするよ？ 明日の昼までには欲しいってことなんだけど」

「なんとかします」

「なんとかなるのかな?」

「それが〈調達屋〉の仕事ですから」

こうなったら、困ったときの松井さん頼みだ——とミツキは携帯を取り出し、(どうか、うま
くいきますように)と祈りながら目を閉じた。

*

「こんな、おじさんじゃなくて、彼に頼めばいい
じゃないですか」と松井はめずらしくミツキをか
らかうような口調になった。

「彼って?」

「カラス博士の彼ですよ」

「ああ」

ミツキの声が一オクターブは低くなったので、
松井はバックミラー越しに彼女の顔色を確認した。
「訊いていいものかどうか、迷っていたんですけどね」

「はい?」

「いえ、その指輪です」

「ああ」とまたミツキは声を落とす。「これ、やつぱり目立っちゃいますよね」

「いえ、目立つつというか——」

信号が赤に変わったので、松井はつとめて滑らかに減速して交差点の手前に停止した。

「私が見る限り、指輪自体は、それほど目立つものではないですよ。どちらかと云うと、シツクで品のいい指輪です。ただ、ミツキさんが、あんまり指輪を気にしているようなので」

「ていうか、抜けないんですよ、これ」

「ええ、そのようですね——」松井は迷いながらも言葉を選んで尋ねた。「外したいんですか?」

信号が青になり、夜空の色をしたタクシーは静かに発進して国道を直指した。撮影所を取り囲む^{たぐい} 一帯は閑静な住宅街で、商店や娯楽施設の類が一切なく、深夜ともなれば、車の一台も通らない。

松井は何度もミツキを迎えに来ていたので慣れてしまったが、街灯もまばらで、いちいちナビを確かめない、すぐに道に迷ってしまいそうだった。

「つまり——その、あれです。ミツキさんは要す

るに決断をしかねている」

「え？」

いきなり「決断」という言葉が飛び出してミツキは戸惑ったが、冷静に考えてみれば松井の云うとおりかもしれなかった。

「というか、決断するのは、もつとずっと先と思っていたから、決断自体に心構えがなくて」

「そんなもんですよ」

「あれ？ 松井さんって結婚されましたっけ」

「いや、私のことはどうでもいいんです。それに、結婚に限らず、どんな決断であっても、『もつとずっと先』って思うもんですよ」

「ええ」とミツキは頷いた。うなず「たしかに、それはそうなんだろうなって思います」

ミラーに映る松井の顔から視線を外し、ミツキは窓の外のただ暗いだけの風景を眺めた。

「でも」気をとりなおしたようにミラーに視線を戻す。「そういう感傷的な問題だけじゃなくて、物理的に、どうしても抜けないっていうのが、すごく悔しくて」

「ああ」と松井は複雑な表情になり、「そういうことですか」と笑いがせり上がってきた。「ミツキさんらしいですよ。負けず嫌いで——」

「なんか、腹立ってきちゃうんです。結婚がどうかじゃなくて。知恵の輪と一緒に、クリアできないとどうもすつきりしなくて。こんな——」そう云って指輪をひと撫なでし、「こんな指輪ひとつに振りまわされて」

「きつと、縁があるんでしょ」

松井が結論めいた口調できつぱりそう云うと、「そうなのかなあ」とミツキは首をかしげた。

「松井さんはどうなんです？ 何度も訊いて申し訳ないですけど、奥さんとか恋人とか——」

ハンドルを握る松井の指に指輪があったかどうかと身を乗り出して確かめたが、いつも白い手袋をしているのはつきりしない。

「いえ、いいんです。私のことは」

松井は首を横に振りつつ、「きつと、縁があるんでしょ」という自分の言葉に、ふと自分で感じ入った。

と同時に「そうだ」と思いつき、

「ミツキさんは、名探偵シユロってご存知ですか?」

「あれ? どうして、『シユロ』ってわかったんです?」

「わかった?」

「ええ。ここ最近、わたしが集めているのは、まさにその『シユロ』で使う小道具なんです。どうして、わかりました?」

「おお」と松井は低く唸うなった。

これぞまさしく「縁」であろう。自分は夜の底を走るしがたないタクシー運転手だが、主演を演じたのか、それともモデルとなった本人なのか、いずれにせよそんな男を乗せた数日後に、その映画の小道具を調達する女の子を乗せている――。

その偶然に素直に驚いた。その一方で、(そんなもんですよ)とニヒルにつぶやくもうひとりの自分もいた。同僚とも何度か話してきたが、東京という街は思いのほか狭いのである。

人と人がどんなふうにつながってゆくかは、さ

まざまな理由があり、その理由となる道筋やきっかけが、この街には無数にある。この街でこの仕事をしていた、いちばん感じるのはそれだ。「偶然、出くわす」確率が圧倒的に高い。

「いや、そんなわけないだろうよ」と松井は古い友人に諭されたことがあった。「東京はこの国でいちばん人の数が多いんだから。偶然、出くわす確率は一番低いんじゃないか？」

もちろん、それも道理であると松井は承知している。

が、結局のところ、人は人を介してつながっていくのだと考えなおすと、数が多ければ多いほど、伝染病のように波及してゆく率も高くなる。

「いやいや、そうは云つても、そうそう偶然なんて起こらないよ。田舎じゃないんだからさ」

友人はなおも食い下がった。

「東京を歩いていて、知り合いとすれ違うなんてこと、滅多にないね」

いや、そうではない。皆、気づいていないだけなのだ。

松井は知っていた。

この街の人々は、自分たちが思っているよりはるかにさまざまなところ、さまざまな場面で誰かとすれ違っている。

たとえば、ほんの道一本の隔たりで親類縁者や知り合いとすれ違っている可能性がある。気づいていないだけで――。

もっと云うと、道一本の隔たりもなく、同じ道の至近距離ですれ違ってもまったく気づかない。それはやはり人が多いからだ、状況をしばってみると――たとえば、タクシーの限定してみれば、いかに偶然が起こりうるかわかる。

端的に云うと、松井は同じお客さんに乗せたことが何度もあった。予約客ではない。街を流している、たまたま乗せたお客さんが、一週間前に別のところで乗せたお客さんだとわかった。なぜ、わかったかという、顔や声と一緒にあったばかりでなく、同じマンションの前で降りたからである。

多くのタクシー・ドライバーが同様の証言をし

ていて、面白いことに、お客さんの方はそうした稀有な事態にまず気づかない。ドライバーの顔や名前がよほど特徴的であれば別だが、ほとんどの客が同じタクシーに乗ったことに気づいていなかった。

それで、松井はもういちどあのひとが自分の車に乗ってくるんじゃないかと、どこかで信じている――。

「で？」とミツキの声が車内に響き、夢から覚めたように松井は姿勢を正した。

「シユロがどうしたんです？」

ミツキが落ち着いた声で松井に訊くと、

「いえ」と松井は首を横に振ってから縦に振った。

「たまたま、お客さんと映画の話になりました――」

「そうなんだ。やっぱり人気があるんだな、あの映画」

「もしかして、今夜もその『名探偵シユロ』に使う小道具を探しているんでしょうか」

「ううん。今日は違うんです。いま、探している

のはシュロの方じゃなくて、別の映画——かけもちなんですよ、わたし」

ミツキはそう答えながら薬指の指輪をもてあそび、おそらく無意識なのだろうが、力をこめてしきりに外そうとしていた。松井はそれを一枚の絵画を鑑賞するようにミラーの中に覗のぞき見ている。

「それは、どんな映画なんです？」

「なんていうか——女の子たちの映画で」

「タイトルは？」

「『II人のマリア』っていうんですけど——」

*

「それでどうなの、映画の方は？　順調に進んでいる？」

いきなりアヤノにそう訊かれ、ハルカはコーヒーに入れた砂糖をゆっくりかき混ぜながら、

「それがね」

と眉根まゆねをひそませた。

「ただでさえ、緊迫しているのに、メイキングの

撮影隊がいつも張りついていて、まったく気が抜けないの」

「メイキングって?」

「映画が完成するまでのドキュメンタリー。いずれ映画がソフトになったときに特典映像か何かに使われるんだと思う」

「何だかすごいよね、まだデビューもしていないのに」

「あとで、貴重な映像になるんでしょうね。デビュー前のわたしたちがどんなだったか——」

「なるほど、そういうことなの」

「それもね、映画の公開に合わせたテレビの特番のドキュメンタリーと、映画の撮影スタッフが延々と記録しているのと、ふたつあるの」

「何それ? 考えただけで、頭がくらくらしてる」

「でしよう?」

「なんだか、ハルカはもう遠くへ行ってしまうんだなっていう気分」

「やめてよ」

二人は学生時代からたびたび利用してきた都心の老舗喫茶で落ち合い、「ひさしぶり」と挨拶あいさつを交わしたあと、声を揃そろえて「なんか、疲れてる？」と訊き合った。

「何かあったんでしよう？」

ずばり訊いたのはハルカの方で、「何かって？」とアヤノは訊き返したが、平静を装った言葉とは裏腹に明らかに動揺していた。

「いまさら、何、とほけてんの。何かあったからわたしを呼んだんでしよう？ 大体、こっちがいま超忙しいってことはアヤノがいちばんよく知ってるんだし」

「ごめんなさい——」

「隠しても顔に書いてあるよ、何かあったって」

アヤノは反射的に自分の頬ほおに右手をあてがった。「云ってごらん。何でも聞いてあげるから。わたし、十一人の中でいちばん歳上としうえでさ、すっかり、お姉さん役が板についちゃって——」

たしかにハルカは心身ともに、ふたまわりくらい大きくなったように感じられた。

「じゃあ、話しちゃうけど」

アヤノは小さく息を吸って、小さく吐いた。

「ハルカには何度か話したことがあるから、わかってくれると思うけど——その——田代たしろさんがね

——」

「え？」とハルカはただでさえ大きな瞳をさらに大きくひらいた。「まだ、あのひとのこと、考えたの？ やめておきなよ、あのひとは。手品師とか何とか云ってたけどさ、わたしが思うに、本当は詐欺師か何かなんじゃない？」

「うん、わかってる」

ハルカに云われると、勢いに負けてアヤノはつい頷いてしまった。

「あのひとつてさ——なんだっけ、トカゲみたいな——周りの環境に合わせて体の色が変わる生きもの」

「カメレオン？」

「そうそう、あれみたいじゃない？ 捉とらえどころ

がないっていうか——だってね——これ云っちゃっていいのかな——いつだったか、わたしがアヤ

ノの食堂でご飯を食べていたら、ちょうど田代さんが来たことあったじゃない」

「違うよ。あれは、ハルカが田代さんがどんなひとなのか見たいって云ったから——」

「そうだっけ？ そんなこと云ったかな。ていうかさ、あのときわたし、云い寄られたんだよね。そういうヤツなのよ、あの男。要注意どころか、嚴重注意人物。でも、聞いちゃう。どうしたの、あのひとが？」

「うん。何か云いにくくなっちゃったけど」

「ごめんごめん。いま云ったことは、とりあえず、全部忘れていいから」

「うん——あのね、食堂によく来るお客さんでね、タクシー運転手の松井さんってひとがいるんだけど」

アヤノはそう云いながら、なんとなく店内を見まわした。

「その松井さんがね、乗せたんだって、田代さんを」

「え？ どういうこと、それ？ どうして田代さ

んだってわかったわけ？」

「わかったっていうか、本当はよくわかってないんだけどね、松井さんが云うには、そのひと、自分のことを俳優だって云ったり、昔、マイティ田代っていう名前で手品師をやっていたって云ったり——」

「ああ、そういえば、そんな芸名を使ってるって云ってたよね。わたしは信じてなかったけど」

「それだけじゃなくて、ちよっと前に公開された探偵物の映画があって、その主人公の役をやってるって云ったり、本当はそうじゃなくて、自分はその探偵本人なんだってほのめかしたり——」

「まさか」

「でも、わたし、その話聞いたら、何となくピンときちゃって、よく考えもしないでマルヤに直行したの——」

「マルヤって？」

「レンタルビデオ屋。商店街の。店の自転車に飛び乗って、歩いて十分くらいなのに、なんかその十分が惜しくて、すごいスピード出して、探すの

ももどかしいから、店のひとに『名探偵シユロ』
って映画、ありますかかって」

「え？ シユロ？」

「あ、知ってる？」

「知ってるも何も、いまわたしが映画を撮って
るところと同じだから、『名探偵シユロ』をつ
くったのは——」

「そうなんだ」

「だから、もちろん知ってるし、結構、ヒットし
たんじゃなかったっけ？ いま、ちょうど続編を
つくってるみたいだけど」

アヤノはハルカがそう云うのを聞いて、ああや
っぱりハルカはもう遠くへ行ってしまふのだな、
と実感した。

「ホントにうといよね、アヤノはそういうことに
わかってる？ 日本を代表する映画会社なんだ
よ？」

アヤノはいよいよ複雑な思いに沈み込んだ。
わたしは一体、何をやっているんだろう。

田代さんもハルカも、いつのまにかそんな大き

な会社に関わ^かわって、そのうえ映画になんか出たりして——いえ、ちょっと待って。そうじゃない。田代さんは映画に出たわけじゃなく、彼をモデルにしてつくられたのが『名探偵シュロ』だった。

「でも、すごく似てたの、シュロっていう探偵が田代さんに」

アヤノが興奮気味にそう云うと、ハルカは「ねえ、落ちていて」とアヤノの目をまっすぐに見た。「映画なんでしょう？　いくら似ていたからって、それで、あの田代さんが探偵だっ^{ことにはなら}なくない？」

「ううん。たぶん、そういうことなんだと思う。松井さんは役者なのか探偵なのかわからないって云ってたけど、わたしにはすぐわかっちゃった。ものすごく似てたけど、映画のシュロは田代さん本人じゃなかった。となると、彼はいつのまにか、探偵になっていったってことよ。それも、世間を揺るがすような本物の名探偵にね」

*

「え？ もういちど云ってください」

松井にそう訊かれ、ミツキは自分の乾いた唇をひと舐めすると、

「落花生の殻割り器」

舌を噛まないようにはつきりと答えた。

「落花生ってピーナッツですよ？ 殻割り器？
くるみじゃないんですか？」

「そうなの。変でしょう？ しかも、ちょっと古いのがいいっていうリクエストなんだけど。大事な小道具らしくて」

「あ」と松井はそこでひらめいた。いつだったか、下北沢へお客さんを送り届けたあと、大通りへ出ようと裏道を走っていたら、あかりを灯している店がぼつりと一軒あった。何だろうとスピードを落として確かめると古道具屋で、「こんな時間に？」と今度は時計を確かめたら、午前三時だった。

「そこへ連れて行ってください」

「かしこまりました。場所がわかればいいんですが」

月の光が夜空の色をしたタクシーを見守るように照らしていた。

*

「ふうん、なるほどね」

と、ひとりごとを云って、イバラギはさつきから飽かずに月を見ていた。右手に銀色の細長い円筒を構え、左手で円筒に取り付けられたダイヤルを調節すると、ガラス越しに覗いた円筒の中で月が二つになったり三つになったりする。

「こいつはいいね」

イバラギはその望遠鏡をどこで見つけたのか、すっかり忘れてしまった。仕入れたときから、それが何という名前のどんな用途に使われるものか、皆目わからず、しかし、そうしたものこそ自分の店にふさわしいと、いつからかそう思うようにな

った。

店の名は凝った名前を考えるのが面倒だったの
で、〈イバラギ〉と自分の苗字をペンキで看板に
書いた。自分としては至って平凡な古道具屋のつ
もりでひらいたのだが、店というものは結局のと
ころ、店主の人となりが如実に反映される。簡潔
に云ってしまえば、〈イバラギ〉は「おかしな
店」だった。

—なにより、彼の生活は昼夜が逆転している。夜
の九時ごろにおもむろに開店し、明け方が迫って
くる午前四時ごろに、あくびをしながら路地に面
した表戸の鍵かぎを閉める。

イバラギは眠いのだった。

とりわけ昼間の太陽が大の苦手で、すぐに薄暗
いところへ逃げ込んで、しばらくすると、うとう
としてくる。子供のころからそうだった。「コウ
モリ病」と彼は勝手に名付けているが、そんなふ
うに勝手に名付けることも彼の仕事のひとつだっ
た。

「月光増幅器——」

彼は円筒を覗き込みながら思いつくままつぶやいた。その得体の知れないガラクタ望遠鏡の名前がようやく決まり、あとは値札にその名を記して、適当な値段をつける。

見る人が見たら「この望遠鏡は壊れてるよ」で終わりだが、イバラギはそんなふうには道具が壊れることが、じつは嬉しいのだった。

人間がつくったものは、壊れることで別のものに生まれ変わる——というのが彼の持論だった。

何らかの目的にしたがつてつくられたもの——とりわけ人間がつくる「道具」と呼ばれるものはあらかたそうなのだが——そうしたものは壊れたときに、ようやく人間に従事することから解放されて、はじめて「自由になる」。彼はそう考えていた。自由になって、役割から解放された道具の本来の名前を考へること。それが自分の仕事になると彼は信じてきた。

云い換えるなら、彼の店に並ぶ品々はほとんどすべて壊れていた。

「透明インクペン」「半分ハット」「温風マシンガ

ン」「穩水^{おんすい}保存容器」——。

店に並ぶのはそうした奇妙な名を持ったものばかりで、店を訪れる客はそれらが壊れた道具なのだ^だと知ってか知らずか、いずれにしても、営業時間のこともあって、客は減りゆく一方だった。

イバラギはしかし新しい商品の名前を思いついたことに満足し、路地から店の中に戻って定位置である作業机の前に座った。読みかけの本をそそくさとひらき、この時間になったらもう客は来ない、いつものように高を括^{くく}った。

あとは眠くなるまで本を読んで過ごすのみ——と、そう思いかけたところへ表戸がひらかれる音が聞こえ、顔をあげて目を細めると、見かけない二人づれが立っている。

男女だった。しかし、おそらくカップルではない。一見して歳の差がひらいているとわかり、しかし、かといって、醸し出す印象は親子でもなかった。

さて？

すぐに見定められなかったのは店内が薄暗かつ

たせいでもあるが、男の方がどうやらタクシー会社の制服らしきものを着ているのに気づいて、イバラギはなおさら混乱した。

ふうむ、と腕を組む。

人のことは云えないが、こういうおかしな商売があるのだろう。すっかり客の減ったタクシー会社のサーヴィスで、深夜の東京を観光案内よろしく走りまわる。深夜の公園や深夜の球場、深夜の飲食店や深夜営業の店々を案内し、東京の知られざる側面を知ってもらおうという企画である。まさか、その「店々」のひとつに自分の店が選ばれるとは思ってもよらなかったが、人の良さそうなタクシー運転手と、まだ若いのに早くも人生に疲れたかのような風情を漂わせる女の子に、勝手な「名付け」をするとしたら、およそそんなところだ――。

イバラギは勝手に納得してひとり頷き、かたや、そんな見当違いな品定めを受けたことなどつゆ知らず、松井とミツキは店内に並んだものとその値札に目を奪われていた。

「あの」とミツキがイバラギに声をかける。

「はい」とイバラギはミツキの意外に明るい声に反応し、人生に疲れているように見えたけれど、案外そうではなく、単に仕事のしすぎなのかもしれない、と自分の妄想を修正しておいた。

「じつは、探しているものがあるんです——」

「ええ」とイバラギは慎重に答えた。「がっかりさせたくないのです、あらかじめお伝えしておきませう」——探しものがあると云ってきた客にはかならずそう念を押していた——「うちは、どちらかというと探しものにお応えこたするというより、この店の中で探しものをしてほしいというか——すみません、なに云ってるかわからないですよ」

「いえ、それはよくわかります」ミツキはなおさら明るい声になった。「わたし、仕事じゃなかったら、もっと楽しめると思うんですけど——」

「仕事？　ですか——」

「ええ。映画に使う小道具を探しているんです」ミツキはそう云いながらも、もしかして自分は

いつのまにか松井のタクシーの後部座席で眠ってしまいい、でも頭だけは健気けなげに仕事を続行していて、それでこんな夢を見ているのかも、と思い始めていた。

だって、こんな夜中に、こんな店がひらいているなんて——。

「何をお探しでしょう？」

イバラギがめずらしくそんな言葉を口にした。

「もしかしたら、お役に立てるかもしれません」

「はい。あの——落花生ってありますよね」

「ええ、ピーナツのことですよ」

「はい。あのピーナツって殻つきのものがあったて——」

「ああ、はい、ありますよね」

「あの殻を押しつぶして——たぶん押しつぶすんだと思うんですけど、くるみ割りみたいに、落花生の殻を割る道具を探しているんです」

「ああ、ピーナツ・クラッシュャーですか」

イバラギは事もなげにそう云った。

「え、そんなものがあるんですか」

「ありますよ。うちは大、中、小、と取り揃えて
いますけど、どれにしましょう?」